

【特別講演Ⅱ】

「上部・下部内視鏡治療 UP TO DATE」 ～より安全なESDを目指して～

講師 長崎大学病院 消化器内科(光学医療診療部) 山口 直之

早期消化管癌に対するESDは現在、全国的に急速に普及し、EMR時代では到底、治療対象ではなかった2 cmを超えるような大きな病変や潰瘍瘢痕を伴う病変などが、ESD時代の到来に伴い、治療適応となり、内視鏡治療がこの20年間で目覚ましい進化を遂げた。

その恩恵は患者にとって大きな福音となった一方で、それに伴う治療手技の高度化により、克服すべき出血・穿孔・術後狭窄など様々な偶発症に対する高度な周術期管理が必要となってきた。

そのため、医師・看護師・内視鏡技師など内視鏡治療に係るすべてのスタッフに高度な医療知識や技術が必須となってきた。

そこで今回、ESDの周術期管理の現状と課題を様々な角度から最新のデータを含めて概説する。